

# 世界をみつめて4

## さまざまな考古学～考古学と社会～

南 博史

発掘調査に関する一つのエピソードを紹介しよう。30年ほど前のことだが、京都市内の工事にとまなう行政調査（発掘）によって市内の遺跡が無くなってしまっているのではないかとというニュースが話題になった。

日本において発掘調査は、研究を目的に行われる学術調査と道路工事や建造物工事などのため発掘調査を行う行政調査がある。行政調査とは工事によって破壊される遺跡は事前に調査を行い、記録（遺物は別に保管、遺構は図面や写真などによって記録）という方法で残そうという考え方である。もちろん、史跡級の発見は現地でも保存される場合もあるがほとんど遺跡は無くなってしまふ。つまり、平安京と重なる京都市内の中心部は1200年前の歴史が埋蔵されているが、年間の行政発掘面積を算出すればおおよそ数十年で掘りつくしてしまうというのである。

しかし、実際は現在も盛んに行政調査が行われている。その理由は発掘調査の対象とする遺跡の時代や種類が変化してきたからである。確かにそのころ京都市内の行政調査の対象は平安京、平安時代の遺跡に限られていた。今は中世の遺構・遺物は発掘調査の対象になっているし、場所によっては近世の遺跡も発掘調査が行われる。たとえば東京では都市の基礎を作った江戸時代を対象とした行政調査が行われ近世の考古学が発展してきたし、北海道においては明治時代の開拓にとまなう遺構や遺物も対象となっている。つまり、考古学の研究の対象となる時代や地域、遺跡がその地域の時代や社会によって相対的に変化、拡大してきたということである。

ともすれば考古学はどこか浮世離れしたような、またロマンの世界というイメージがあるが、一方でその時代や社会と密着した現実的で厳しい世界でもあるのだ。旧石器ねつ造事件とその後の考古学に対する社会の評価もまたその一コマであったといえる。

### さまざまな考古学

社会や時代によって展開してきた考古学は現在、社会科学から自然科学まで多様な分野の研究との連携が進んでいる。たとえば放射性炭素14分析による絶対年代の測定は考古学が目指す相対年代の実証には不可欠となっているし、遺物の成分分析による産地同定、植物遺体の分析による古環境の復元、人骨の分析から明らかになる当時の食生活や栄養状態、DNA情報などが新しい考古学の成果につな

がっている。また、社会科学分野では、今や考古学と文献史学は補完関係にあるし、民俗学や地理学との連携は日本では古くから進んでいる。さらに、各時代の社会や文化を復元するために文化人類学や社会人類学などの理論や実践的研究の成果も導入されている。

こうした他分野との連携による研究の深化によって、新しい研究領域も生まれている。理論的<sup>\*1</sup>なものを除いて代表的なものをあげてみよう。

歴史と自然環境との関係を重視して研究する環境考古学。実験考古学は、遺構・遺物の複製を製作・使用する事によってその使用法などを実証的に明らかにする。水中考古学は、水中にある遺跡や遺物などを調査する考古学である。資源衛星などを使った考古学調査もある。また、近現代の戦争に関する遺跡を対象とした戦跡考古学も新しい分野であるし、地震の痕跡を遺跡からさぐる地震考古学は、防災という観点からも注目を浴びている。

### おわりに

考古学の成果は学術的価値だけではなく、その社会にとってさまざまな価値があり、それに対して考古学者が主体的に関わるべきだというパブリック考古学が近年盛んだ。遺跡の観光地化が地域経済と密着しているように<sup>\*2</sup>、こうした課題は世界各地のさまざまな分野・局面で大きくなってきている。筆者が進める本学の国際文化資料館を中心とした「考古学と博物館を仲介者とした実践的地域研究」もその課題解決への一環である。

結局「自分たちの今を理解し未来を知るために過去を明らかにしたい」という一人一人の考古学者の思いや熱意、良心や見識が考古学を発展させていくのだということを再確認しておきたい。

\*1 たとえば、60年代にはアメリカの考古学者ルイス・ペンフォードによる「プロセス考古学（ニューアーケオロジー）」、70年代イギリスの考古学者イアン・ホダーらによる「ポストプロセス考古学」、さらには近年「認知考古学」という理論も発表されている。

\*2 観光客の増加によって急速に遺構が傷んでいるベルーのマチュピチュ。また、近年注目を浴びている「天空の城」兵庫県の国史跡竹田城内での市当局による観光客のための無許可道路整備問題などがある。

みなみ ひろし（教授・考古学）